

I I 作品論

I I - A アイスキュロスの正義の思想、 氏族社会と都市国家における正義の論理

I I - A - 1 アイスキュロスの『アガメムノーン』における「正義の讃歌」 — 正義と報復の論理 —

アイスキュロスはアテーナイ市エレウシス区の名門のエウポリオンの子として紀元前525年に生まれた。ギリシアはこの頃独裁政治から民主政治に移り変わろうとしている激動の最中にあり、ホメーロスの描く青銅器文化の王制の時代から暗黒時代と呼ばれる混乱期をくぐり抜けて、7世紀には貴族政治が独裁者を生み出す時代に入っていた。地中海の商業と海運が8世紀頃にフェニキア人からギリシア人の手に握られるようになると商人中産階級の手には政治権力が握られ、貴族階級との対立抗争が激しくなってきた。その階級対立の中で法律を定めて整備し、活発な経済活動の中で債務を負って没落していく農民の権利を守り、調停者として活躍したのが立法者として記憶されている賢人ソロンやリュクールゴスなどである⁽¹⁾。しかしそれらの人々のあいだには権力対立の間隙を利用して政権を篡奪した独裁者もいた⁽²⁾。むしろこういう人物のほうが多いので6世紀は独裁者の時代と呼ばれている。

アテーナイにおいてもペイシストラトスとその子ヒッピアースが独裁者として権力を握っていた⁽³⁾。しかしこの時代の独裁者は、おおむね政治家としては社会の抱える問題を鋭く見抜き、党派の利害を強権によって調停し、時代の変化を先取りした見事な文化政策を行った名君だった。ペイシストラトスの場合もソロンの定めた法律を守りながら中小農民を保護し、有力貴族とは友好関係を保ちながら積極的な公共政策によって彼は都市住民の支持を取り付けた。彼の積極的な外交と通商政策、大規模な土木工事や神殿建築と並んで重要なものが文化振興策であり、その代表的なものがパンアテーナイア祭と大ディオニューシア祭の制定である⁽⁴⁾。アテーナイ市の守護神アテーナーを祭るパンアテーナイア祭での市民の行列の様子はパルテノン神殿の浮き彫りで窺うことができるが、ペイシストラトスはこの祭典でホメーロスの詩の朗唱をすることを始め、これがそのテキストの確定と文字化に貢献した。それに続いて春のディオニューソスの祭りで行われる歌と踊りの競技に始まった悲劇の競演を重要な国家行事のひとつとして制度化し、ギリシア文化の精

華ともいうべき悲劇隆盛の基盤を彼は作り上げた。

しかしその息子のヒッピアースの代になると次第に強権政治に傾き、独裁者に抵抗する動きが強まる中で弟のヒッパルコスが暗殺されると⁽⁵⁾、彼はその後の動乱の中で追放され前 508 年の改革でアテーナイに民主制度が確立する。アイスキュロスが生まれ育ったのはまさにこの時代であり、彼は独裁政治が倒れ民主制度に移行する中で成人したのである。さらに前 490 年にペルシアのダーレイオス王が⁽⁶⁾、亡命してきたヒッピアースを伴ってギリシアに侵攻してきたときには祖国防衛のためにマラトーンやサラミスの戦いで敵を撃退した⁽⁷⁾。彼が独裁者を憎み生命を賭して民主政治を守ったことは、後に彼がシシリアのゲラで没したときの墓碑銘にただ父の名と生国の他には、マラトーンで勇敢に戦ったことのみが記されていた事実からも偲ばれる。ポリス国家においては市民の義務はまず第一に祖國を防衛することであり、そこから民主政治に関与し国家行事に参加するさまざまな権利が生ずるのである。

アイスキュロスは前 500 年頃から悲劇を書き始め、前 484 年には最初の優勝を獲得したがその作品は残っていない。前 472 年頃彼はシラクサを訪問し、そこで『アイトナの女性たち』という作品を、僭主ヒエロンによる前 476 年のアイトナ市の建設を記念して書いた⁽⁸⁾。前 468 年に彼はディオニューシア祭においてソポクレスに負けたが、翌年には『テーバイを攻める七人の将軍』で優勝し、前 458 年には『オレスティア』三部作で優勝した。彼は前 456 年にもシシリアを訪問し、その地のゲラにおいて没した。彼は悲劇競演において十二回優勝し、死後にも優勝を重ねた。彼の死後アテーナイ市民はその劇を上演しようとする者に対して国家がコロスの費用を負担するという決議をして彼の功績を讃えた。

彼は生涯に 90 篇の作品を書いたとされ、そのうち 80 余篇の題名が伝えられている。主題は神話、トロイア戦争、アルゴー船の冒険⁽⁹⁾、テーバイ市の物語、ダナオスの一族の伝説などから取材しているが、『ペルシア人』だけは例外で、同時代のペルシア戦争を取り扱っている。彼の作品は七作品が完全な形で残り、他は 400 あまりの断片で伝わっている。現存の作品は、『ペルシア人』『テーバイを攻める七人の将軍』『救いを求める女たち』『オレスティア』三部作、『縛られたプロメーテウス』である。

『オレスティア』はアイスキュロスの晩年の作品(前 458)で『アガメムノーン』『供養する女たち』『慈みの女神たち』から成り、三編が完全に残っている唯一の三部作である

(10)。ギリシア悲劇は春のディオニューシア祭の三日間を使い、三人の詩人がそれぞれ一日がかりで悲劇三篇とサテュロス劇一篇を上演し(11)、優劣を競う国家行事であった。悲劇の三部作はこの上演形式から生じた形式であり、主としてギリシア神話から取った題材を相互に関連のある三題の劇に分けて全体でまとまりのある作品に仕上げたものである。この三部作形式はアイスキュロス以後にはあまり用いられなくなり、三篇の劇は各々独立した悲劇に発展していく。

『オレスティア』三部作は、トロイア戦争の英雄アガメムノーン一族にまつわる悲劇である。この一族の物語はタンタロス、ペロプスという神々と交渉を持つ神話世代から(12)、アトレウス、アガメムノーン(13)という英雄世代にまで及ぶ。三部作という劇構成はこの壮大な物語を上演するのにまさにふさわしい形式であった。

この劇はこの長大な物語の中から、トロイアから帰還したアガメムノーンがその妻クリュタイメストラによって殺され、その仇討ちを息子のオレステースが母に対して行うという事件に焦点を当てていく。アイスキュロスはこの一族の血で血を洗う復讐の物語に正義の観点から光を当てその本質に迫る。ギリシア語の「正義(ディケ) dike」は「報復、裁き」までも含む意味の広いことばである。しかし正義の裁きを自らの手で執行するという氏族社会の掟は無限の報復の応酬という悪循環に陥る。ある倫理の掟に忠実であろうとすればするほどその掟に伴う矛盾に苦しむ人間の姿を、ギリシア悲劇は主題として取り上げている。この抜き差しならぬ結果を招く報復の論理から脱却して、新しいポリスにふさわしい倫理と解決方法をこの劇で詩人は模索する。この解決方法は氏族社会の掟や家への義務の重圧におしひしがれた個人の苦しみのみならず、当時のポリスの政治状況における市民の悩みに対する回答も示唆していると思われる。

まずこの三部作のあらすじを紹介しておこう。第一部『アガメムノーン』は、トロイア遠征に勝利を得て帰還した王アガメムノーンを王妃クリュタイメストラが暗殺する夫殺しが中心のテーマである。トロイア戦争はトロイアの王子パリスによるメネラーオスの妻ヘレネーの誘拐という事件が発端となった。国際法の存在しない時代には「ゼウス・クセニオス」(14)の掟に頼る以外に民族間の信義を護る方法はなかった。スパルタ王メネラーオスの客人であったにもかかわらずこの掟を破ったパリスを罰するために、アガメムノーンは正義を護るゼウスに代わる懲罰者としてギリシア軍を率いてトロイに遠征することを決定する。

この劇の場面に先立つ十年前のことであるが、トロイア遠征の艦隊を集結させたギリシ

ア軍の総帥アガメムノーンは、逆風に悩み出航のための順風を得ようとして長女イーピゲネイアを女神アルテミスへの犠牲に捧げることが余儀なくされた。この事件は王妃クリュタイメーストラの心に深い恨みとなって残り、『オレスティア』の第一部『アガメムノーン』において王妃はその愛人アイギストスと共謀して、勝利を得て凱旋した王を暗殺する。驚き惑うコロスに対して彼らは自己の行為の正しさを主張する。王妃は娘のための報復の正義を、アイギストスはアガメムノーンの父アトレウスによって辱められた自分の父のための報復の正義を。しかしこの正義の名による報復行為は当然に次の報復行為を呼ぶことになる。

第二部『コエーポロイ』ではアガメムノーンの息子オレステース⁽¹⁵⁾が他国で成人して帰国し、父王の墓の前でたまたまそこに詣でた姉エレクトラーと再会する。彼は旅人として身分を偽り、親友ピュラデースと共に王宮に入り込み母と対決する。クリュタイメーストラは自分の行為を弁解しながら生みの母を手には掛けないようにと胸を露わにして懇願するが、その母親をオレステースはアポロンの命令だと言って殺す。

第三部『エウメニデス』では母殺しの罪を宗教的にはデルポイ⁽¹⁶⁾で浄められたオレステースは、法の上での裁きをアテーナー女神⁽¹⁷⁾が司るアテーナイのアレイオス・パゴスの法廷⁽¹⁸⁾において受ける。母親の血を流した罪を訴追するのは復讐霊エリニュエス⁽¹⁹⁾であり、他方父親の仇討ちを命じたアポロンは彼の弁護を引き受ける。エリニュエスとアポロンは母子の関係と婚姻関係の優位性をめぐって論争するが、陪審をつとめるアテーナイ市民の賛否の評決は同数となり、結局アテーナー女神の裁定によりオレステースは無罪放免となる。エリニュエスは由緒ある復讐霊としての職分を無視されて憤り、アテーナイ市民に呪いをかけようとするが、アテーナーは女神たちを宥めて新しい職分を授ける。エリニュエスはエウメニデス（恵みの女神たち）⁽²⁰⁾と名を変えて市の守護神として祭られることで怒りを収める。アガメムノーン一族であるアトレウス家に伝わる呪いとは、神の正義の掟を人間の手で執行する時に生ずる限りない報復行為の悪循環であった。近親者の手による報復の応酬を公正な司法の裁きに委ねて解決し、その呪いの輪を断ち切るのは市民社会の叡知である。復讐の女神はアテーナーの説得をいれて恵みの女神に変身し、この都が市民の間の抗争によって疲弊することなく平和の繁栄を誇るようにと祝福を与える。一族が殺し合う血の争いの呪いと、市民の間の絶えざる分派抗争は根が一つであり、その問題解決の方法は共通であると詩人は訴えているのである。

ここで『オレスティア』における「正義」の思想について、特に第一部『アガ멤ノン』を中心に考えてみよう。一般にこの劇の中で「正義 dike」ということばがしばしば使われているために、『オレスティア』は正義を主題にした劇であると考えられている。しかしこの正義の意味は単純ではない。すでに述べたようにディケーは「裁き」の意味も本質的に伴っている。『オレスティア』では一つの正義の執行がまた別の報復行為を招く結果になるため、その果てしない報復の応酬という悪循環をどこかで断ち切らねばならない。第三部『エウメニデス』における女神アテーナーの裁決はこの要求に応える解答でもあった。しかし公的な権威による裁判が個人の間を争いを調停することができても、国家と国家の間を争いにはまだ有効な方法はなく、戦争という手段に訴えて一方が他方を完膚なきまでに打ちのめし、滅ぼし尽くしてやっと争いが熄む例が少なくない。その場合の悲惨は敗者のみならず、勝者にとっても量り知れないのである。『アガ멤ノン』はトロイア戦争を背景にして、正義を標榜する王や将軍たちの恣意や名誉心の犠牲になる罪なき民の死の問題にも焦点を合わせている。イーピゲネイア、カッサンドラー⁽²¹⁾という穢れ無き乙女たちの死の描写にはさまれた、罪なき民と兵士の死についての嘆きの歌は、戦争に伴う悲惨な結果を明確に描き出していると言えるだろう。

ではここで「正義の讃歌」と呼ばれているコロスの歌を取り上げて、トロイア戦争がどのようないきさつから生じたか、またどのような惨禍を平和な民衆の生活に及ぼしたと歌われているかを見ていこう。

「正義の讃歌」

「古くから言い慣わすことばがある、
人の幸が大きく育ってしまうと子供を生み、
子供無しで死ぬことは決して無い、
また良い運命からは一族にとって
絶えざる艱難が生い出でるものだ。
しかし私は他人とは考えが異なる、
不敬の業(dyssebes)こそ後の日に数知れぬ不敬を
自分によく似た子孫たちを生むのだ。
正しいわきまえの家からは
常に美しい子供が生まれる定めだから。

古さびた 驕慢(hybris)はとかく
若やいだ 驕慢を産みがちだ
人々の邪悪の中で、時を経て
定められた 産みの日がやって来れば。
戦うことも抗うことも敵わぬ 神霊(daimon)を、
洗神の 放縦(thrasos)を
か黒い禍(ate)を家の中に、
その親に 良く似た子を。

正義(dike)の女神は
煙に煤けた賤が家の中にも輝き、
律義な人を讃え給う。
黄金敷く館といえども 不浄の人が住めば
目をそむけて立ち去り 敬神の家を訪れる、
詐りの榮譽の刻印が押された
富の力を顧みることもなく、
ものすべてを 正しき方へと導き給う。」

(Ag.750-781)

この「正義の讃歌」には二つの思想の流れがある。一つは「古くから言い慣わすことば」として世間に広く認められている伝統的な道德観であり、もう一つは「しかし私は他人とは考えが異なる」と詩人がこの劇で強調しようとする独自の思想である。そして後者はコロスの口を借りて述べられてはいるものの、ここには詩人自身の考えが色濃く反映されていると言えるだろう。

第一の思想は「飽満(koros)-傲慢(hybris)-禍い(ate)」として表現されるもので、富が大きくなり過ぎると驕慢(hybris)を生じ、やがては破滅(ate)に至るという考えである⁽²²⁾。これはソローン、ピンダロス⁽²³⁾、テオゲニス⁽²⁴⁾等に見出される思想であり、当時の人々の一般的な考えだった。この箇所では「富」(olbos)ということばが用いられていて「飽満」(koros)は使われていないが、次の引用では「富み栄えに飽くことを知らぬ」(to men eu prassein akorestōn ephy) という表現にその考えが見られ、「飽満」(koros)と「慢心」(hybris)

が王を無謀な戦争に導くのみならず彼の破滅をも用意すると歌われている。

「富み栄えには 飽くことを知らぬのが、あらゆる人の性だから、

他人が指差して羨む家に 住んでいても 富を拒む人は無く、

『もうこれ以上入って来るな』と言うことも無い。

この殿に対しても 至福なる神々は

プリアモスの都を 取れよと与えられ、

神々の誉を受けて 彼は祖国に帰り着いた。

今やもし 古えの流血を彼が償い

自分の死によって 死者たちに

他者の死の償いを 果たすならば、

それを聞いて 勝ち誇るのは誰だろうか

神霊(ダエモン)の 加護の下に生れたと。」

(Ag.1331-1342)

第二の考えは「正義の讃歌」の中でコロスが「他の人々とは異って」と特に断りながら「不敬の業が、後にそれに勝る不敬を生む」と述べていることである。富は人を傲慢な心に駆り立てて不敬な業に導くものだという考えがここで述べられているのであれば、それは伝統的な思想とあまり異なるとは思われない。しかしコロスがここで特に他者とは異なる考えを強調している点に留意して、どんな行為が不敬の業と見なされているのかを次に検討してみよう。

ところでこの「不敬」(dyssebes)ということばが表われるのは、この箇所以外には『アガメムノン』では第 219 行である。ここは十六年前のトロイアへの遠征軍の出立の様子をコロスが回想して歌う場面である。アガメムノン王は、逆風に妨げられて海岸に足止めされた遠征軍の総指揮官として、女神アルテミスの怒りを宥め順風を吹き送って貰うために、娘イーピゲネイアを犠牲に捧げるべきか否か重大な選択を迫られる。父親としての愛情に屈して娘を救えばトロイア遠征を放棄することになり、ギリシア全土から馳せ参じた将兵から裏切者と侮られる。この苦渋に満ちた選択の岐路に立たされた彼は、遂に王としての義務に従う道を選び私情を棄てる決断をするが、その行為が後に彼を滅ぼす二重の原因となるのである。その一つはアキレウスと結婚させるからと言う口実で娘を騙し取られて殺された王妃クリュタイメーストラの恨みであり、もう一つはその苦しい決断によって彼が受けた痛手が憤激となり、数々の残虐行為や不敬な業となって敗北したトロイアの

人々に向けられたことである。

「強制(ananke)の軛を 肩に負って以来
彼は心の風向きを 吹き変えてしまった、
罪深く、不敬不浄な心持へと、
それからは 如何なることでも
やってのけようという 考えに心変りした。
恥知らずで陰惨な狂乱は 人を不遜な行動に
駆り立てて 災いをもたらすものだから。
こうして彼は敢然として娘の屠り手となり
女の仇を討つ戦いの援軍を率い
船出の儀式を執り行ったのだ。」

(Ag.217-226)

このように公的な義務に迫られて娘を我が手に掛けざるを得なかった王は、「不敬な(dyssebes)」気持ちに駆り立てられ、「どんな事でもやってのけようとする(panto-tolmos)」⁽²⁵⁾ 決意を固める。恥すべき狂乱は人間を「不遜にする(thrasynei)」からであるとコロスは説明している。こうして「不敬から不遜が生ずる」ことについては、同じ作品の第三部でも「傲慢は不敬(dyssebeia)の子」(Eum.534)という似た表現がされている。ここは復讐女神エリニースが自分たちと正義の女神ディケーを敬い、オレステースを母殺しの罪で罰するようにアテーナイの市民たちに要求している場面である。

アガメムノーンが余儀なくされた選択は、どちらに転んでも結局は自己の破滅を準備する性質のものであったが、娘を犠牲にして心が荒み、「何でもやってのける」(panto-tolmos) 決意をした彼は、戦争のもたらすあらゆる残虐行為を敢行しその責任を引き受けることになる。王の帰還に先立って帰国した伝令はこれを暗示する報告をする。

「さあ王を立派にお迎えせよ、まことにそれはふさわしいことだからだ。裁きをもたらすゼウスの鶴嘴を以ってトロイアの地を掘り返した方を、その地はそれによってすっかり覆えされてしまったのだ。祭壇も神々の社も破壊された、そしてその土地の種子も皆滅ぼされてしまったのだ。」(Ag. 524-528)

ここで伝令が明かした神殿破壊は正に不敬行為の最たるものであり、他民族の神々にも自国の神々との共通性を見出して崇敬するギリシア的敬虔の立場から許されない汚神の行為である。これはアイスキュロスの劇『ペルシア人』においてクセルクセースがギリシア

の神殿を破壊して自分の破滅の原因を作るのと全く軌を一にするものである。更に「種子 (sperma)」は人間の胤をも暗示するものとも解釈できるので、やはり「不敬な思い」から「不敬な業、残虐行為、滅び」へと向う荒廃した心の筋道が明確に跡づけられる。⁽²⁶⁾

劇の初めにコロスが入場して最初に述べる「鷲の饗宴」の前兆もこの観点から解釈することができる。ギリシアの従軍予言者カルカスは、アガ멤ノーンとメネラーオスの目の前に現れて仔を持つ兎を貪り食らった二羽の鷲はふたりの王を表し、遠征の勝利を示すものと占い解く。しかし勝利がまた残虐行為を伴う暗い反面をも併せ持つことをこの占いは暗示していたのである。

「賢い従軍の予言者はこれを見て、
争って兎を喰らう鷲たちは
気性の異なる ふたりのアトレウスの子、
軍を率いる王たちであると悟り、
前兆をこのように解いて言った。

『やがてはこの遠征軍はプリアモスの都を占領し、
城壁の前に人々が共通の財産として持つ家畜を
モイラ（運命）は力づくで奪うだろう。
ただ神々の嫉みが ギリシア軍に、
トロイアを抑える大いなる轡に対して向けられぬように。
なぜなら憐れみの気持ちから、淨いアルテミスが
父なるゼウスの翼ある犬に憤っておられるからだ、
仔兎もろともお産の前に、惨めな兎を貪る鷲に。
鷲どもの饗宴を女神は憎み嫌われるのだ。』」

(Ag.122 - 137)

それ故「正義の賛歌」において作者が一般的な道德観である「富（飽満 koros）— 傲慢 (hybris)—禍い(ate)」よりも「他の人々とは異なって」と断って「不敬(dyssebeia)—傲慢 (hybris)—不遜(thrasos)—禍(ate)」の関係を説いた意図が、トロイア戦争という事件との関わりに置いて一層理解しやすくなるのである。そして「正義の讃歌」がトロイア戦争の原因であるパリスとヘレネーへの呪詛の後に続くことを考えれば、その意義はさらに深くなるであろう⁽²⁷⁾。

さてここで不敬の業から傲慢（驕慢 hybris）不遜（放埒 thrasos）という禍いが生まれる

と記されているが⁽²⁸⁾、これらが或るテキストでは大文字で記されて擬人化され⁽²⁹⁾、特に不遜(放埒 thrasos)が神霊(daimon)のひとつとされていることに注意を喚起したい。古典時代のギリシア語テキストは全て大文字で書かれていたので、現在のテキストによって大文字と小文字の違いがあるのは、編者がそれらを神格として扱うのか、あるいは単なる抽象概念として見るのかという解釈の違いに基づく。しかしここでは不遜(thrasos)は神霊と見なされているのであるから当然大文字で記されるべきであるし、その他の抽象概念についても「生まれる」という擬人化した表現が用いられている。抽象概念を擬人化して系図を作り、それらの相関的な近縁関係を理解し易くするのは、ヘーシオドスの「神統紀」にも見られる概念規定の原初的手法である。ここで一般の神話体系の外にある道德概念を擬人化しているのは、それによってこの劇におけるこれらの概念の意義を特に強調しようとする意図が働いているものと考えられる。そしてこの場面に続いてそれらの概念とは徳目において対照的な、これも擬人化された正義の女神ディケーが登場するのである。

前の方式にならってこれを表現すれば、「清貧—敬神(敬虔)—正義(dike)」あるいは「清貧—律儀—正義(dike)」と表わすことができるだろう。ここで「敬神、敬虔」と訳してあるのは、「hosios — 神の掟によって義とされる」ことであり、それは「dikaios — 人間の法によって正しいとされる」こととは明確に区別される。「律義」と訳したのも、「enaisimos — 公正、義しい」ことであり、語源的には「配分された運命(Aisa)の中にある」即ち「分を知る」というニュアンスがあると言ってよいだろう。これは庶民の理想であり、先に挙げた王侯や富者の横暴と対比されている。戦争はこういう庶民が富める強者の恣意によって惹き起こされた争いに巻き込まれ、平和な生活を破られ、生命を奪われる禍いであるから、王たちがいかに愚かな理由を口実に戦争を開始するのかと、この禍の原因をパリスとヘレネーの事件をコロスは想起して彼らを呪詛しつつ明らかにするのである。彼らがゼウスの報復の正義を執行する報復者として自己の名分を主張すればするほど、真の敬神と正義とは庶民の側に輝やきわたると言えるだろう。

「正義の讃歌」で歌われた「清貧—敬神—正義」の精神を、甘やかされて驕った富者の「不敬—不遜」が踏みにじる時、その行為は神々の懲罰を受け、国家の滅亡という禍いを招く。「dike」には「正義、裁き、罰、報復」の意味があるが、アガメムノンたちギリシア軍は「dikephoros — 正義をもたらす者、審判を為す者、報復者」たるゼウスに代ってその意を行うものとされている。これと同じことばをアガメムノン暗殺後にアイギストスが用いていることが印象的である。「おお、正義をもたらすこの日の、喜ばしき光よ!

今やっと私は人間の為に報復を為し給う神々が、高き処より地上の苦しみを見そなわすと
言うことができる、この男が復讐女神らの織り上げた長衣に包まれ、小気味良くも倒れて
いるのを見る時、彼は父親の悪巧みの業の償いをしたのだ。」(Ag.1677-1582)

コロスはこの「正義をもたらす裁き手」によって、正義を侮りゼウス・クセニオスの掟
を破ったトロイアが厳しく罰を受ける様を歌う。

「おおゼウスよ、王よ、また親しき夜よ、
大いなる名誉を 与える者よ、
あなたはトロイアの 城壁に
もの皆覆い尽くす 投網を打ち掛け給うた、
大いなる者も若き者も 一人とて
奴隷の罠から 逃さぬように
全てを捕らえる 禍い(ate)の網を。
主客の間の掟を守る 偉大なるゼウスを
私は敬います、御神はこの業をパリスに向けて
疾うから 弓を引き絞り給うたのです。
征矢を射損じて それが星を越え
逸れ行くことの 無いようにと。」

(Ag.355-366)

アトレウス家の王たちはこのように、ゼウスの正義の執行者、審き手としての自己の立
場を強く主張していたが⁽³⁰⁾、その報復行為に巻き込まれて罪なき民が犠牲となると、こ
んどは人々の恨みのみならず神々の怒をも我が身に受ける結果になる。「ゼウスは放埒な
人間どもを高く聳える希望から投げ落す」のが習いである(Supp. 96-98)。王妃が凱旋した
夫を歓迎すると見せかけて用意した高価な敷物を、神々の嫉みを怖れたアガメムノーンが
土足で踏まぬように細心の注意をたとえ払っても、もっと大きな罪を他所で犯していれば
滅びを免れることはできない。王は復讐の執行者として行動しながら、復讐女神エリニュ
エスの追求を自ら受ける身となる。

「恨みを籠めた国民の ことばは重く
人々が認める呪いの負債を償わせる。
我が心は 夜の闇に潜むものを
聴こうとして怖れて待つ。

神々は多くの血を流した者共を
看逃すことは無いのだから。
黒づくめの復讐の女神(Erinyes)は いつの日か
正義に外れて 栄える者を
人生の逆運に衰えた
影薄い身に追い落す、
忘れられたその身には 寄る辺すら無い。
度を過ぎて 名高いことも
辛いこと、ゼウスから雷が
その家に投げつけられる。
嫉みを受けぬほどの 幸こそが望ましい。
都を略奪する者になど なりたくないし、
自分もまた 捕われの身となって
他人の下で 暮らしたくはない。」

(Ag. 456-474)

このコロスの最後のことは、アガメムノーンが神の嫉みを受け罰せられるのは、プリアモスの都を掠奪したからだということを暗示している。さらにまた残虐行為や神殿破壊もその理由に加えられているだろう。高きに在る者ほど落ちることは甚だしい。王の没落と非運はここに厳しく予言されている。そして王の暗殺後に全てを目撃し事件の顛末を知ったコロスから、同様の言及が改めてもっと明確になされている。この場合はコロスは、一族の争いと国の間の争い双方に関しての感慨を次のように述べている。

「咎めに代えて 返り来るのは咎め
いずれが正しいのか 裁くことは難しい
掠奪者は掠奪され、殺した者は償いをする。
ゼウスの玉座に在る限り その掟には変りが無い。
『為した者こそ 仕返しを受ける』のだ。
家の外に 呪いの種子を 誰が棄て得ようか？
この一族は禍いに 膠づけされている。」

(Ag.1560-1566)

『オ레스ティア』の全編を貫く正義と正義の争い、報復と報復のぶつかり合いのもたらす凄惨な結果を見据え、コロスはここで「為したことを仕返しされる」(pathein ton erxanta) という冷厳な掟を口にする。これは「為した者に対して仕返しが為される」(drasanti pathein)⁽³¹⁾ という因果応報の定め of 言い換えであり、この定めは人と人の間、国と国の間を交りなく支配している。個人と個人の正義の主張に基く争いと報復の応酬は、法という市民社会の原理で止揚され、復讐霊は市民の守護霊となるという方向で解決が目指されている。しかし国家と国家の間の争いは一方が他方を打ち倒し滅ぼし尽すか、或いは双方が疲弊してそれ以上争いが続けられなくなるまで継続されるのが常である。国際法や人権を守る法律が未整備であった古代においては、人々はゼウス・クセニオスの宗教的な国家を越える権威に託して信義の保障を期待した。そしてその信義が破られた場合には戦争という露骨な生の暴力に訴えることがもっとも手っ取り早い単純な解決法だった。しかしそういう安易な解決方法に対して、「罪なき者の死」という形で詩人は問題提起をしている。トロイア戦争に出陣した英雄の多くは、帰国後に殺されたり内輪の争いに敗れて追放されたときまざまに語り伝えられている。戦争の唱導者をそういう形で葬り去ることが、国と国の争いに疲れた国民の解決法の一つなのだろう。

『オレスティア』はアトレウス一族の争いを主題に扱ってはいるが、第一部『アガメムノン』はその背景にさらにトロイア戦争の悲劇を重ね合わせている。イーピゲネイアの犠牲も、カッサンドラーの死も、アガメムノンの暗殺もその戦争の結果である。個人は家に属し、一族の呪いに縛られる。しかしその家もまたより大きな国家に属し、そこでは個人の生命も家族の悲しみも大義の前に軽視される。権力に傲った支配者の個人的な動機に始まった戦争が国家の名によって個人を押し潰し、その支配者すらも没落させる。まことに「軍神アレスお気に入りの笞は二股で、穂先も二つの血染めの一組」⁽³²⁾(Ag. 642-643) という表現のとおり軍神は両者を容赦なく打ちのめすのである。

アイスキュロスの活躍した時代は、国民が結束して独裁者に立ち向かい、ペルシャの大軍を中産市民階級から成る重装歩兵の戦列で撃退した、国民精神の高揚した輝ける世紀であった。その活力が商工業の発展を呼び覚まし、溢れる経済力が学問芸術と演劇活動に振り向けられる余力を生み出した。しかし詩人の鋭い感覚と批判精神はすでにその繁栄の陰に忍び寄る凋落の兆しを、国民と政治家の傲り高ぶった行動の中に明敏に読みとっていたのであろう。同盟国の拠出金がアテーナイへの貢納金に変質し⁽³³⁾、同盟に不満を抱く国々に対する威圧的な態度は対立するスパルタを硬化させアテーナイは孤立する。それは「正

義の賛歌」で詩人が厳しく戒めた「富、傲慢、禍い」の行き着く姿であった。アイスキュロスは名声の頂点にあって故国を去り、シシリアの地で客死したが、その行動の背景には力に傲る祖国へのこの批判の感覚があったのではないかと思われる。

註

(1) ソローン [Solon 前 640 頃-前 558 頃]

アテーナイの貴族の家柄の出身。詩人として有名な政治家。594 年にアルコンに選ばれ、負債に苦しむ人々のために「重荷下ろし」と呼ばれる負債免除の法を作った。その他の議会と法律を整備した後に外遊しクロイソスにも会ったという。古代七賢人のひとり。

リュクールゴス [Lycurgus 前 600 以前]

スパルタの伝説的な立法者。ゲルーシアという長老政治、エフォルス制という王を補佐するスパルタ独特の政治制度を整えたとされるが、これは建国以来の有力な政治家の寄与を個人の名前に集約した伝説であろう。

(2) 独裁者 [tyrannos]

僭主とも訳される。後に tyrant と称されるカリグラやネロのような暴君を連想させるが、本来は正当な法的手続きによらずに実力で専制権力を奪取した者を意味する。社会的階層の対立の狭間において抜き差しならぬ難問を強権によって解決した名君も多い。

(3) ペイシストラトス [Pisistratos]

前 570 年のメガラ戦争で名を挙げ、アクロポリスを占拠してクーデターで独裁者(前 560-前 527)になった。中小農民の利益を守り、税制を改革し、道路や水道を建設して公共事業を興し、国力の増強に努めた。一時国外に追放されるが、外国の援助により帰国し傭兵に頼り政権を維持する。

ヒッピアース [Hippias]

アテーナイの独裁者(前 527-前 510)。ペイシストラトスの長男。彼の弟ヒッパルコスの暗殺後は苛政に傾き、スパルタの攻撃によりペルシアに逃れる。ペルシア軍と共にマラトーンに進軍する。

(4) パンアテーナイア祭 [the Panathenaea]

毎年七月頃にアテーナイ市で行われるアテーナー女神の祭り。騎馬競争と音楽競演に

ペイシストラトスが詩の朗読を付け加えた。ペリクレスは音楽競演のためにオデオン劇場を建設した。祭りの最終日には、名家の子女が高価な縫い取りをした上着などをアクロポリスの女神の神殿に奉納する行列があった。この行列の様子はパルテノンの回廊の浮き彫りに見事に描き出されている。

大ディオニューシア祭 [the Great Dionysia]

毎年三月頃に外国の使節とギリシア中の旅客を招いてアテーナイ市で行われるディオニューソスの祭り。祭りはアクロポリスの麓の神殿に神像を運び込む行列に始まり、付属の劇場では同盟国の貢納金の展示や戦死者の顕彰を行い、その後に合唱隊の歌舞と悲劇や喜劇の競演が行われた。

(5) ヒッパルコス [Hipparchus]

ペイシストラトスの次子。文芸を愛好し保護したが、放縦な性格のためハルモディオスとアリストゲイトーンらの憤激を買ひ、パンアテーナイア祭の最中に暗殺された(前514)。この二人は殺されたが、固い友情に結ばれた暴君暗殺者として後の世に語り継がれた。

(6) ダーレイオス一世 [Darius I 前521-前486]

アケメネス朝の祖。マゴス僧の陰謀を覆して王位に就く。国内の反乱を抑えて統一し帝国を地方に分けて太守に統治させ、中央集権による強力な王権を確立した。イオニアのギリシア植民市の反乱に干渉したギリシアを懲罰するために本土遠征を行い、マラトーンにおいて王の大軍はギリシア連合軍に敗れた(490)。

(7) マラトーン [Marathon]

アテーナイ市北東の海岸沿いの平野。ペルシアの大軍は海陸の連絡が悪く、この地を守る一万人余りのギリシア軍に大敗した(前490)。アイスキュロスの兄弟のキュネゲイロスはこの戦いで敵の船を攻撃中に戦死した。この勝利を報告した使者を記念して、その走行距離で現在のマラソン競技が行われている。

サラミス [Salamis]

アッティカ沖の小島。ダーレイオス王の子クセルクセスは、さらに海陸の大軍を準備してギリシアに侵入した(前480)。テルモピュライを守るレオーニダース以下のスパルタ軍は全滅し、アテーナイも都市を放棄して敵の略奪に任せた。しかし今度はアテーナイの海軍力は充実しており、将軍テミстокレースはサラミスの海峡に敵軍を誘い込んで完敗させた。

(8) ヒエローン [Hieron、-前 476]

478 年にシラクサの僭主となり、シシリアを制覇してアイトナ市を建設した。彼は文芸を愛好し、多くの詩人たちを彼の宮廷に招いた。アイスキュロスが彼のために『アイトナの女たち』を書いたのもこの時である。オリュムピアなどの戦車競技で優勝した彼のために、ピンダロスは数編の頌詩を捧げている。

(9) アルゴー船の冒険 [Argonautica]

ロドス島のアポロニウス(前3世紀)の作品が代表的。ギリシア中部のイオルコス市のイアーソーンは、奪われた父の王国を回復するために黒海の奥地コルキスに黄金の羊の毛皮を求めて航海する。彼はアルゴーという人声を発する船を建造し、ギリシア全土の英雄を集めて出航する。その中にはヘーラクレスやオルペウスなどがいた。彼は王女メーデイアの助けを得て目的を果たして故国に帰る。この話はギリシア人が始めて海に乗り出した大航海時代に得た海洋知識を背景にしたものと考えられている。

(10) 三部作 [Trilogy]

アイスキュロスの現存の作品を含む三部作としては a) 『ピーネウス』『ペルシア人』『グラウクス』そしてサテュロス劇『プロメーテウス』、b) 『ラーイオス』『オイディプース』『テーバイを攻める七人の将軍』そしてサテュロス劇『スピックス』、c) 『アガ멤noon』『コエーポロイ』『エウメニデス』そしてサテュロス劇『プロテウス』、d) 『救いを求める女たち』『アイギュプトイ』『ダナオスの娘たち』そしてサテュロス劇『アミューモーネー』がある。

(11) サテュロス劇 [satyric dramas]

当初は悲劇三部作の後に続く第四部として演じられ、悲劇作品の重苦しい感情を鎮める狂言のような役割を果たしたが、後にそれだけで独立して演じられるようになった。コロスをディオニューソスの従者であるサテュロスが務め、滑稽で卑猥な仕草を演じた。

(12) タンタロス [Tantalos]

ゼウスとブルートーの子。この一族から、ペロプス、アトレウス、アガ멤noonというギリシア神話と悲劇における重要な人物が現れる。

(13) アガ멤noon [Agamemnon]

ミュケーナイ、アルゴスの王、弟のスパルタ王メネラーオスと共にヘレネーを誘拐したトロイアの王子パリスを懲罰するためにギリシア軍を率いてトロイア遠征に旅立つ。この時に海を渡る順風を求めて長女イーピゲネイアを女神アルテミスに犠牲に供したこ

とが王妃クリュタイメストラの憤激を招き、帰国後に王妃と共謀したアイギストスによって暗殺される原因となった。

(14) ゼウス・クセニオス [Zeusu Xenios]

「客をもてなす、主客の間の掟を護るゼウス」と訳す。宿泊施設の整わない古代において、身分の高い旅人は各地の知人の家に滞在した。特に王侯貴族は互いにもてなしあって高価な贈り物まで与えて送り出すのが常であった。それは主客の立場が変われば同じ待遇が期待されているのであり、その交友と信義は数世代にわたって継承されることが多かった。その信義はゼウスの保護と保証のもとにあり、それを破ることは重大な罪と考えられていた。

(15) オレステース [Orestes]

アガメムノンとクリュタイメストラの子。父王の暗殺後、危険を恐れた姉エレクトラーによって他国に送られそこで成人する。その後アポロンの命により父の仇を討つために盟友ピュラデースと共に帰国し、姉と再会してともに計略を巡らして目的を果たす。

(16) デルポイ [Delphi]

ギリシア中部にある由緒古いアポロンの神託所。中部諸都市の宗教連合の中心となる祭祀の聖地でもあった。この地は世界の中心であるとみなされ、大地の「臍、オムパロス」と呼ばれる石があり、殺人などの重罪犯人はこの石に縋ってアポロンの加護を求めた。オレステースもここで母殺しの罪を浄められた後にアテーナイで世俗の法律の裁きを受けた。

(17) アテーナー女神 [Athena]

元来はギリシア先住民の大地の女神であったらしいが、ギリシア民族の侵入以後はオリュムポス神話の中に組み入れられて機能が分化し、アクロポリスの古い宮殿と王家の守り神がポリス全体の守護神となった。神話ではゼウスとメーティス（知恵）の娘であり、ゼウスの頭から完全武装の姿で生まれたとされるので、女神は『エウメニデス』において父親のみを親とするという理由で父親の権利を擁護する役割を演じている。

(18) アレイオス・パゴスの法廷

アテーナイ市にあるアクロポリスに隣接した岩山。伝説によると軍神アレースは、ポセイドンの息子ハリロティオスがアレースの娘アルキッペーを犯そうとしたのでそれを殺し、神々がこの岩山に設けた法廷で裁かれた。それを起源にしてエピアルテースの

民主改革以後は、殺人や放火などの重罪事件を裁く法廷として用いられるようになった。オレステースも母親殺しの裁判をこの場所で受けることになる。

(19) エリニュス [Erinys] (複数, エリニュエス [Erinyes])

肉親の血を流す罪を犯した者を追及する復讐の女神。アイスキュロスの『オレスティア』では母親クリュタイメストラの亡霊に率いられて犯人を追い回す恐ろしい悪霊の姿で描かれているが、エウリピデスの『オレステース』では罪人を悩ませ発狂に追いやる良心の呵責として合理的に説明されている。

(20) エウメニス [Eumenis] (複数, エウメニデス [Eumenides])

デルポイで宗教的な浄めを受けたオレステースは、世俗の法の裁きを受けるためにアテーナイ市に来て、重罪犯を裁くアレイオス・パゴスの法廷で裁かれる。エリニュエスは母親側に、アポロンは父親側に立って弁論を行うが、市民の陪審員の票が分かると女神アテーナーは父親側に投票してオレステースを無罪放免する。憤激して呪いの声を挙げるエリニュエスは市の守り神エウメニデス（恵みの女神）となる条件で和解を受け入れるが、これはこの女神が本来は豊穡の女神であった起源を暗示するのであろう。

(21) カッサンドラー [Kassandra]

トロイアの王プリアモスとヘカベーの娘。アポロンによって予言の術を授けられながら神の意に従わなかったので、誰もその予言を信じないようにさせられた。ギリシア人が兵を潜ませた木馬を残して立ち去った時にそれを城内に引き入れることに彼女は反対したが、その警告を聞き入れる者は無くトロイは落城し彼女は捕虜となった。アガムノーンは彼女を愛妾として故国に連れ帰ったが、王妃は二人を共に謀殺した。彼女の名は「世に入れられぬ予言者」の代名詞になっている。

(22) Page, D; *Aeschylus*, p.136.

(23) ピンダロス [Pindar, 前 518-前 438]

古典期の抒情詩人。ディテュラムボス詩人として活躍。また各地の王侯貴族のための頌詩、シラクサの僭主ヒエロン、アクラガスの僭主テロンの戦車競技の祝勝歌なども書いた。

(24) テオグニス [Theognis, 盛時, 前 544-前 541]

メガラ出身のエレゲイア詩人。前6世紀末の貴族と平民の争いの激動の時代に、彼の属する貴族的な心情を表す詩を書いた。

(25) 「何でもやってのける」 [panto-tolmos, all-daring]

イーピゲネイアを犠牲に捧げることで、全軍の指揮官としての公的義務と父親としての私情の間に血の涙を流したアガ멤ノーンはその怒りをトロイアの敵に向け、必要以上の残虐行為と不敬行為に走った。しかし娘を奪われたクリュタイメーストラはその憤りを王に向け暗殺という手段に訴えた。その王妃をカサンドラーが怪獣のような「何でもやってのける女(Ag. 1237)」と評したことは注目に値する。

(26) Enger, R.; *Aeschylos, Agamemnon*, s. 47

(27) パリス、ヘレネー [Paris, Helene]

トロイア戦争の原因は、神話の上ではかなり遠く離れたところにある。アキレウスの父となるペーレウスが海の女神テティスを得て結婚し、その饗宴に神々を招いた時に争いの女神エリスだけは招かなかった。女神は遅れて宴席に現れ、黄金のリングをテーブルに投じたがその表面には「もっとも美しい女に」と彫ってあった。ヘーラー、アテーナー、アプロディーテーの三美神がそれを争い、判定をトロイの王子パリスに求めた。女神たちはそれぞれ権力、知恵、世界一の美女を報酬として約束したが、パリスはアプロディーテーに栄冠を与え美女を確保した。しかしその美女ヘレネーはすでにスパルタ王メネラーオスの后となっており、王が彼女を得たときに争った求婚者たちは誰が婿になっても万一の場合は彼を助けるという誓約をしていた。そこでこの誓約に従ってヘレネーを取り返し、パリスを懲罰するための遠征軍を全ギリシアの王、英雄たちが起こしたのである。

(28) *hybris, thrasos, tolma* については「西洋古典学研究」XVII、池田論文参照。

(29) 擬人化は比喩の一種である。「エポス」第6号、池田論文参照。

(30) Ag. 41, "antidikos", Ag. 47 "arogos". これらは裁判の用語であり、裁き手としての自覚が強く表れている。cf. Fraenkel, ad.loc.cit.

(31) 「為した者に対して仕返しが為される」

氏族社会の「掟、テミス」によれば、一族に加えられた犯罪に対しては同じ氏族の構成員が報復の義務を負っていた。そしてその犯罪が同族同士で行われた場合は一族を二分する争いに発展することもあったが、それが同じ家族の内部で行われた場合には想像を絶する悲惨な結果を招く。ギリシア悲劇はこのような人間の倫理と愛憎の問題を扱って極限まで追及し余すところがない。『オレスティア』は氏族社会からポリス国家へと共同体が変質し、個人の忠誠の対象が氏族から国家へと変化していく過程において生ずる難問をどのように解決しどのような倫理規定に従うべきかという問題を扱っている。

社会体制がどのように変わろうとも、「(ある犯罪行為を) 為した者には(同じような行為が) 為される」のは自然の原理である。その論理を劇に登場するそれぞれの人物が自分の行為を正当化するとき用いている。しかし他面ではその「正義」は報復行為に他ならず、限りない報復の応酬という悪循環を招く。新しい社会には新しい「正義」の基準があるべきであり、それは劇においては社会が個人に代わって裁く「法、ノモス」という形で与えられる。

しかしその法の精神を全員が理解して遵守するまでには長い時間と多くの苦い経験が必要である。これを詩人は「苦しみによって学ぶ」と簡潔に表現し、またそれが「ゼウスの強制的な恵み」だと述べているのである。

(3 2) 軍神アレース [Ares]

ゼウスとヘーラーの子。ギリシア神話では美しい青年の姿をとり、アプロディーテーの愛人とされ、トロイア側に味方する。戦争の盲目的な暴力を表し、アテーナーの理知的な戦いの勇気とは対照的な神である。

(3 3) 同盟国の抛出金

ギリシア諸都市は再度のペルシアの侵入に備えて同盟を結び、そのための軍資金をデーロス島に蓄えてこの同盟をデーロス同盟と称した。しかしアテーナイは盟主の立場を利用して前 454 年にこの基金をアテーナイに移し、その結果抛出金はアテーナイに対する貢納金の性格を帯びるようになった。諸都市はこの立場を不満として同盟から離脱しようとするが、アテーナイはこれを武力で鎮圧する。アイスキュロスはこの変革の前の 456 年にシシリアで没する。前 440 年にサモスを始めとして離反する都市が続出する。